〈山月記〉材源論

賴衍宏

銘傳大學應用日語學系　助理教授

摘要

針對中島敦之〈山月記〉，一般論調傾向於原係一場自我意識之悲劇，另有一新說則倡言安祿山叛亂時期之歷史性。

經查證三才，筆者確認其時代背景乃設定於安祿山作亂前夕。進一步探究唐史，更證實縱使安之叛意昭然若揭，玄宗仍採取「只殺蒼蠅、不打老虎」之姑息策略。此刻，最宜發揮功能、打下安祿山之＜虎＞者，非御史臺莫屬。

中島利用《論語》虛構了「狂狷」之士。此一主角必然要化身成「虎」，之後更可看出牠欲撲向帶有「鄉愿」性格之監察御史。其再三「自嘲」，似乎意在嘲弄「不打老虎」之政局。

藉由上述結構分析得以窺知，〈山月記〉創作主題應在於諷刺失能之彈劾權。戰爭體制之下，有此歷史小說之發表，似已率先道出日本有見識者之共同心聲。

關鍵詞：《論語》、狂狷、鄉愿、彈劾、《醉醒石》

受理日期：2014.08.31

通過日期：2014.10.24

A Study on the Source Issue of The “Sangetsuki”

Lai, Yen-hung

Assistant Professor, Department of Applied Japanese, MCU

Abstract

General arguments tend to consider “Sangetsuki” by Atsushi Nakajima as a tragedy of self-consciousness. There is also another newly proposed view on the historic significance of the An Lushan Rebellion.

After referencing the three elements, I confirmed the time background of “Sangetsuki” was set to just before the An Lushan Rebellion. After further studying the history of the Tang Dynasty, it was proven that even though An’s intention to rebel was very clear, Emperor Xuanzong still adopted the excessively tolerant strategy of “killing a fly only, never beating a tiger”. At that moment, the censorate was the best choice to apply its functions and beat the ‘tiger’, An Lushan.

Based on the “Analects of Confucius”, Nakajima made up an “ardent and cautious” person as the leading character, who inevitably turned into a “tiger”. This character’s intention to go at the investigating censor with the personality of a hypocrite then is even more obvious. Nakajima’s repeated “self-mocking” seems to be an implication of mocking the political situation of “never beating a tiger”.

Based on the structural analysis above, we can see the subject of “Sangetsuki” should be satirizing the incompetent impeachment power. The publication of this kind of historical novel on a war footing seems to be the first to show the common thoughts of the knowledgeable in Japan.

Keywords : “Analects of Confucius”, ardent and cautious, hypocritical, impeachment, “Zuixingshi”

「山月記」材源論

頼衍宏
銘伝大学応用日語学系　助理教授

要旨

中島敦「山月記」については、従来は自我意識の悲劇と位置付けられてきた。一方、安禄山の乱が起こった時期における歴史性を提唱する新説もある。

三才を調べたところ、その時代背景は安禄山の乱が勃発する寸前であると確かめられる。唐史をさらに探究すると、たとえ安の叛意が明らかになった段階に至っても玄宗はやはり「蝿を殺すが虎を打たない」という姑息な策略を採ったと確認できる。目下、最も機能を果たし、安禄山なる＜虎＞を打つべきところは、御史台に越したところはない。

中島は、『論語』を活かして「狂狷」の士を作り出した。そしてその主人公は、必然的に「虎」へと化した後、「郷原」の性格を帯びた監察御史に踊りかかったものと見える。繰り返される「自嘲」の意図は、「虎を打たない」政局を嘲弄することにあったらしい。

上述の構造分析を経ることにより、「山月記」の創作主題は弾劾権の機能喪失に向けた諷刺のほうにあると窺い知ることができる。「山月記」は、戦争体制のもとで、日本の有識者たちの間で共有されていた心の声を率先して語り出すかのように発表された歴史小説なのである。

キーワード :『論語』、狂狷、郷原、弾劾、『酔醒石』

「山月記」材源論

頼衍宏

銘伝大学応用日語学系　助理教授

1. はじめに：旧説と新説

1942 年 2 月、「文学界」[1]に中島敦の小説「山月記」が発表された。戦後、日本の高校の国語教科書の定番教材として収録されるとともに、作品論と教材論が雨後の筍のように現れてきた。

この作品をどう捉えるべきか、研究者の間でも意見が一致しない。従来の説は、分銅惇作「『山月記』　教材の扱い方と実践授業の展開」[2]という一文において、提示されている。

(1)人間存在の不条理性

(2)おくびょうな自尊心と尊大な羞恥心とにわざわいされる自我意識の悲劇

特に(2)については、「近代的な自我意識の悲劇」と定義づけられている。その観点は、「自らの性格を解剖してそこに原因を求めようとする過程に「心理的」で「近代的」と呼ぶ方法が顕現する」[3]といった形で敷衍されている。一般的な解釈といえよう。

それに対して、小森陽一の卓論「自己と他者の〈ゆらぎ〉―中島敦の植民地体験」[4]が登場することで、通説は書き換えを迫られている。

> 李徴が虎になった理由を「尊大な羞恥心」と「臆病な自尊心」を「飼ひふとらせた」結果に求め、さらに、そこに李徴の詩業の「欠ける所」を重ね、それを「人間性の欠如」あるいは「愛の欠如」だと意味づけている。おそらく、ここに、戦後の国語教育のイデオロギー上の最大の問題がある。

---

[1]138-144 頁。引用はこの初出による。
[2]宮崎健三（編著）『小説の教え方』（1968、東京：右文書院、211・215 頁）
[3]石井和夫「「星女郎」と「山月記」」（「文芸と思想」2004 年 3 月、23 頁）
[4]『〈ゆらぎ〉の日本文学』（1998、東京：日本放送出版協会、252 頁）

確かに、戦前に成立したテクストを戦後の考え方で解釈しては不条理な点があると認めざるをえない。それに加えて、同論文では「知識人の自意識と、文学者の業に物語を回収しようとする従来の解釈は、明らかに『山月記』の歴史性を隠蔽する」[5]として、旧説のアキレス腱を突いている。「歴史性」については、小森論文は小説冒頭の年代設定「天宝の末年」に着目して、「唐の玄宗の治世の最晩年」「楊貴妃への愛に溺れ」「安禄山によって安史の乱がひき起こされた時期」だと見事に喝破している。そのうえ、『山月記』が浮上させる「歴史性」とは、具体的に「兎を殺して食べて虎になった李徴と、権力闘争で殺しあう人間たちの、どちらが「善」でどちらが「悪」なのか、といった、単純な二項対立を無効にする懐疑」にあるとしている。さらに、安禄山のような「節度使が中央に従わなくなったからこそ、「監察御史」なる役職が重要性を帯びてきたのだ」として、袁傪の肩書きに込められていた意味を鋭く見出している。

安禄山が活躍したという時代背景を明示した小森説に従うべきである。しかし、「山月記」をもっと正確に理解するためには安禄山の動乱直前の状況を徹底的に洗い直すことが必要なのではないだろうか。筆者はこうした問題意識に基づき、以下歴史性を論じていく。

2.安禄山の陰影

中島敦が創作するに当たって依拠した唐の原典と読み比べると、「人虎伝」の内容をそのまま受け継いだ点以外に「山月記」特有の書き方もある。次の四点から、安禄山の姿を垣間見ることが出来るだろう。

<1>天宝「末年」：「人虎伝」には、異本が二つある。年号は同じ「天宝」でも、「十年」[6]と「十五年」[7]の差がある。「天宝十年」

[5]注 4、242-243
[6]（宋）李昉（他編）『太平広記』（1977、台北：古新書局、901-902 頁）
[7]国民文庫刊行会（編）『国訳漢文大成　第十二巻』（1924、東京：国民文庫刊行会、495 頁）

本に基づいて中島敦は「天宝の末年」に書き換え、「安禄山の乱の直前に」主人公李徴が「科挙に合格した」という三浦吉明[8]の重要な指摘がある。中国の書物の叙述を見ると、「安禄山の乱」が「天宝の末年」と共に登場することが多い。例えば「自従天宝末年安禄山叛乱以来」[9]、「天宝末年，安禄山発動叛乱」[10]などがある。この歴史の常識に従えば、「末年」にした中島は、間もなく安禄山の乱が勃発する時代性を喚起する意図があったといえよう。

<2>嶺南：「袁傪といふ者、勅命を奉じて嶺南に使し、途に商於の地に宿つた」「袁傪が嶺南からの帰途には決して此の途を通らないで欲しい」というように、長安から嶺南に出張してくるという袁傪の行動経路が二ヶ所で語られている。嶺南という地名は、玄宗皇帝夫妻と安禄山にとって、特別な意味があった。（宋）羅願（撰）『爾雅翼』[11]によると、天宝年間嶺南より茘枝が献上されたところ、楊貴妃は早馬で安禄山に届けさせた、という。（唐）袁郊（撰）『甘沢謡』[12]を見ても、天宝十四載（755 年）六月楊貴妃の誕生日に際して、玄宗は長生殿で新曲を演奏させたところ、ちょうどそのとき嶺南の茘枝が到着したので、それに因んで「茘枝香」という曲名が決まり、皆喜んだ。しかし、同年安が反旗を翻した、という。唐の伝奇と宋の訓詁書に従えば、袁傪を嶺南に赴かせた一因は、玄宗夫妻が安禄山に果物を下賜しようとしたことにあったと看取できる。

<3>暁角：中島敦のノート[13]の中に、「長生殿（洪昇）」という書物が記されている。安禄山の乱の一部始終を描いた、清初戯曲の名作である。脚本には、乱が収まった後、玄宗が楊貴妃を偲んだ「霜天暁角」[14]という詞がある。それに対して、「山月記」の「暁角」

[8]「「山月記」の季節について」（「人文研究：神奈川大学人文学会誌」2002 年、121 頁）
[9]王曙『唐詩名句詳解詞典』（2002、北京：北京工業大学、135 頁）
[10]楊子家（編著）『一言難尽 隋唐五代歴史現場』（2012、蘇州：呉軒、310 頁）
[11]2002、合肥：安徽教育、68 頁
[12]新興書局（輯）『筆記小説大観第九編』（1975、台北：新興、102 頁）所収
[13]高橋英夫（他編）『中島敦全集３』（2002、東京：筑摩、223 頁）
[14]（清）洪昇（著）徐朔方（校注）『長生殿』（1958、北京：人民文学、224

は乱が始まろうとする段階に当たる。そもそも唐の詩人朱湾に「寒城晩角」[15]を題とする詩がある。郎宝如（評注）『中国古典詩詞精華類編　軍旅巻』[16]はじめ、趙栄蔚『唐五代別集叙録』[17]などは詩題を「寒城曉角」に作る。朱湾が「五更初発寒城中」と詠じているが、「五更」に鳴らす角笛の声が「曉角」[18]に当たるという指摘に従えば、「五更」に発した朱湾の角笛は、「曉角」と言える。そこで、「寒城曉角」という異本が支持されるのであろう。卞孝萱（編）『唐代文学百科辞典』[19]も「寒城曉角」という詩題を掲げ、これは「安史の乱以来の動乱の現実に感慨を覚える」作品と説明している。郎宝如[20]によると、「角笛の声は元来軍隊伝令の合図であり、辺境の前線にしか聞こえないはずである。今になっては中原内地の至るところから角笛の音が耳に入っている」という。安禄山の乱のせいで軍用の「暁角」が中国の各地に鳴り渡る、というわけである。「山月記」の主人公が活動した場所が商於（河南）だが、「何処からか、暁角が哀しげに響き始めた」という原文を再吟味すると、やがて河北より攻め込む安禄山による戦禍を免れられないという脅威が漂ってくるだろう。

<4>噂：旧友同士が久々対談する機会に恵まれてまず話題になったのは、虎になった経緯という超自然の現象を差し置いて、なんと「都の噂」であった。噂の一節は「半原典に就き、半中島の創意にかかっている」という高田瑞穂[21]の指摘がある。「人虎伝」と「山月記」を分かつものとしては、そのほかに<1>や<3>や李徴らの性格描写なども挙げられるが、当面「都の噂」は最優先に取り扱われる喫

頁）
[15]（清）彭定求（等修纂）『全唐詩』（1960、北京：中華書局、3479 頁）
[16]1996、呼和浩特：内蒙古大学、164 頁
[17]2009、北京：中国言実、127 頁
[18]銭仲聯（編）『愛情詞与散曲鑒賞辞典』（1992、長沙：湖南教育、901 頁）周本淳：「此種角声謂之暁角，五更吹響」
[19]2003、上海：漢語大詞典、140 頁。原文は中国語
[20]注 16、165 頁。原文は中国語
[21]「山月記（二）《中島敦鑑賞》」「国文学解釈と教材の研究」1960 年 1 月、147 頁

緊の課題である。この点、「都では、楊貴妃が玄宗の愛を一身に受けている、といううわさでいっぱいさ」[22]という解釈がある。「うわさ」は中国語の「流言」[23]に当るものである。安史の乱を研究する際に重要な史籍と[24]される（唐）姚汝能『安禄山事迹』[25]を繙くと、755年5月宰相の楊国忠が大臣に「流言禄山蓄不臣之心」と話している。則ち、天宝末年に安禄山の謀反計画が都の朝廷の高官達の噂に上ったのである。

「天宝の末年」が天の時に当たり、「嶺南」がゆかりの地であり、「角」と「噂」が人の行為だとすれば、安禄山の見え隠れする文脈が三才によって成り立っていると言えよう。

3.材源と中島敦の改編

「山月記」を創作した時期、中島敦が利用した漢籍の源泉はどういうものであったのだろうか。岸達志「「山月記」の比較文学的考察」[26]によると、「原拠を唐の李景亮作の「人虎伝」に従ったものである」という。以後、その方向で研究が進められ、前田角蔵「自我幻想の裁き――「山月記」論――」[27]は「人虎伝」のテキストとして『太平広記』系と、『唐人説薈』系との二種類があるとし、中島敦が利用したのは『唐人説薈』系だとしている。一方、高橋英夫（他編）『中島敦全集１』[28]は、『国訳漢文大成』文学部第十二巻所収の李景亮撰「人虎伝」を典拠としていると見定めている。七言詩の有

[22]中島敦（原作）司敬（作画）『山月記・李陵』（1992、東京：ぎょうせい、21頁）
[23]武信彰（他編）『プログレッシブ中国語辞典』（1998、東京：小学館、511頁）
[24]馮天瑜『中華文化辞典』（2010、武漢：武漢大学、233頁）彭鉄翔：「是研究“安史之乱”的重要史籍。」
[25]2006、北京：中華書局、91頁
[26]「近代文学攷」1953年11月、1頁
[27]「国語と国文学」1993年10月、53頁
[28]2001、東京：筑摩、529頁

無から判断すると、詩のある『国訳漢文大成』のほうがより説得力があるであろう。

3.1『酔醒石』という材源

しかし、「人虎伝」が享受されていくうちに中国後世の文人によって変奏されていく。（清）東魯古狂生が編んだ『酔醒石』所収第六回「高才生傲世失原形　義気友念孤分半俸」がその一つである。今村与志雄[29]の訳注を参看すると、袁傪の名を「李儼とした点を除けば、筋立ては「李徴」と同じである」という。

『酔醒石』については、「日本帝国大学支那哲文研究室蔵」[30]という蔵書と、「民国初、武進董康誦芬堂（ママ）が日本所蔵の明刊本を利用して増刷した」という再版記録が残っている。それは東京大学中国思想文化学研究室現蔵の『酔醒石』(誦芬室1917年版)であると確認でき、つまりは東大生の中島敦にとって身近に借覧できる漢籍といえる。この白話小説『酔醒石』[31]を読み直すと、主人公の名は「李微」となっているが、重要なのは、「当時之人．也説他是箇才子．不敢与他抗衡．他越発自尊自大起来」という李微像であろう。中国語の「自尊」「自大」とはそれぞれ「自尊心が強い」[32]、「尊大である」という定義がある。それに従えば、『酔醒石』の李は「自尊心が強くて、尊大な」人物だと言える。相対的に「山月記」の李は「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」を持つ人物だと描かれている。『酔醒石』を若干改編した結果、「山月記」の主人公の個性が成立したと精確に見極めなければならないだろう。

3.2『論語』材源試論

『酔醒石』などの他にも、材源がもう一つ隠れているのではあるまいか。テクストを再度熟読してみると、「複雑な思考にも堪へ得る

---

[29]『唐宋伝奇集（下）』（1988、東京：岩波、331-332 頁）
[30]譚正璧（他著）『古本稀見小説彙考』（1984、杭州：浙江文芸、121-122 頁）原文は中国語
[31]東魯古狂生（編）『酔醒石』（1917、武進：誦芬室、酔六 1a-11a 頁）
[32]北京・商務印書館（他編）『中日辞典』（1992、東京：小学館、1967・1962 頁）

し、経書の章句をも誦ずることも出来る」という一節が目を引く。「経書の章句」については、「四書（大学・中庸・論語・孟子）五経（易経・書経・詩経・礼記・春秋）」[33]という語注を参照すれば、特に『論語』の側から「山月記」の主題を問い直す視点がより有効であろう。

3.2.1「狂」なる李徴像

『論語』の名句を鏤めた形で、中島敦の没後に小説「弟子」が発表された。そのうち、「狂者ハ進ンデ取リ狷者ハ為サザル所アリ」[34]という一句が見られる。「狂者は（理想が高くて）意欲的だし、狷者は（節操がたかく）一線を守ることを知っている。『論語』子路第十三」[35]と語注にある通り、狂狷は格別悪い性格を示すわけではない。さて、「山月記」の本文には「狂」が次の六ヶ所にあらわれる。すべて李徴に関する描写である。

① 彼は怏々として楽しまず、狂悖の性は愈々抑へ難くなつた。
② 一年の後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿つた時、遂に発狂した。
③ さうすれば、しまひに己は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂ひ廻り、今日の様に途で君と出会つても故人と認めることなく、君を裂き喰うて何の悔も感じないだらう。
④ 産を破り心を狂はせて迄自分が生涯それに執着した所のものを、一部なりとも後代に伝へないでは、死んでも死に切れないのだ。
⑤ 偶因狂疾成殊類　災患相仍不可逃
⑥ しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮つてゐるとしか考へない。

[33]中島敦『中島敦：1909-1942』（1992、東京：筑摩、27 頁）
[34]「中央公論」1943 年 2 月、142 頁
[35]注 28、566 頁

精神異常の症候をめぐる描写が大多数を占めるうち、「山月記」の李徴の性格に「狂」の要素を付与しているのは①だけである。「人虎伝」を確かめると、発狂関係の記述はあっても、主人公の性格は「性疎逸恃才倨傲不能屈跡」とあって、「狂」を帯びた気配がない。「山月記」の一源泉として利用された『酔醒石』では、「猖狂放恣」「傲放猖狂」「恣肆狂放」という個性が付与されている。「猖狂」「狂放」はそれぞれ「凶暴な」「ほしいままにふるまう」[36]意味であり、マイナスの価値判断を含む。「狂悖」[37]とは「非常識で道義にそむく言動をすること」であり、これも、確かにマイナスの意味を有するものではある。しかし万一社会通念が間違っていた場合、その反抗する気骨は最終的な結果としてプラスの評価を獲得する可能性を秘めていたことになるだろう。『酔醒石』の「狂」を継承したとはいえ、「山月記」は「狂悖」という独自な文学世界を新たに築きあげていたのである。

3.2.2「狷」なる李徴像

「人虎伝」、『酔醒石』などの主人公像と峻別すべく、中島敦は「性、狷介」として新しい李徴像を創出している。とりわけ重視すべきは「狷」という形容詞であろう。

狂と狷が『論語』においてセットとなっている点は、見てきた通りである。施忠連『霊犀和覚悟：心性的智慧』[38]は孔子を論じているなかで、「狂」「狷」は往々にして「狂悖」「狷介」（謹直自守）と繋がる、という。従って、「山月記」の「狂悖」「狷介」なる李徴は「狂狷」の士という人格の持ち主であったという事実を追認しなければならない。

[36]注 32、165・804 頁
[37]日本国語大辞典第二版編集委員会『日本国語大辞典』4（2001、東京：小学館、483 頁）
[38]2005、台北：新潮社、234 頁

中島敦は三十一歳に際して、「五月五日自晒戯作」[39]と題した五言詩をものしている。

行年三十一　狂生迎誕辰　木強嗤世事　狷介不交人（下略）

この詩においては、「狂生」「狷介」という措辞が対を成しているが、簡略化すると「狂」「狷」が同時に姿を現しているのである。自画像というべき漢詩においても、また複数の小説においても、中島敦は「狂」「狷」に拘りを見せている。その背後の思想基盤の本質をもっと深く追究すべきではあるまいか。

中島敦が残した断簡を通覧すると、清の学者「汪容甫」[40]に触れている点が目を引く。陳熾彬『汪容甫学述』[41]によると、汪は「狂士」「性格狷峭」という。その人となりは早くも（清）呉鼒による人物評で「実に古節士の風を具え、固に孔子のいわゆる狂狷なり」[42]と述べられた通りである。

中島敦は、「山月記」の李徴に対しても共通した認識を持っているはずである。安禄山の叛乱寸前まで玄宗は側近からの警告を聞き入れずにいる。『安禄山事迹』[43]によると、安が絶対造反するに違いないと主張する者が現れた場合、安への信頼が厚かった玄宗は、その者を安のところに送り処置を任せている。そこで、安の邪悪な心を摘発する者がいなくなった、という。その結果、安の賊軍が河北から長安へと破竹の勢いで勝ち進むこととなった。天宝末年の政局は、安禄山の乱が必至だということは明白になったにもかかわらず、玄宗の一存で輿論が完全に窒息してしまったのである。「狂狷」[44]な

[39]高橋英夫（他編）『中島敦全集２』（2001、東京：筑摩、328 頁）
[40]注 13、460 頁
[41]1983、台北：国立政治大学中国文学研究所、19・22 頁。原文は中国語
[42]注 41、23-24 頁。原文は中国語
[43]注 25、91 頁。原文：「或言禄山反者、玄宗縛送祿山、以是道路相目、無敢言者。」
[44]「狂悖の性」については、「狂狷的個性」（森鴎外（他著）姚巧梅（訳）『大師小品：日本短篇精典』（1992、台北：自立晩報、178 頁））という訳文がある。

る李徴にとっては、そうした「俗悪な大官の前に屈する」ことは無理であり、ついに発狂しないわけにはいかないだろう。

なお、地名の意味を吟味すると、まず、李徴の古里である虢略が注目に値する。王維の漢詩「送李太守赴上洛」を見ると、「丹泉通虢略，白羽抵荊岑」[45]（筆者訳：丹泉の水、虢略に通じ、白羽の地、荊岑にいたる）という一節がある。李徴が生きた時代に「虢略」が通用していたことがわかる。「虢略」の具体的な所在については、「弘（或宏）農=虢略」[46]という指摘に従えば、弘農に相当するところである。

次に「汝水」の流域については、中島敦のメモに記されている『水経注』[47]を繙くと「出弘農盧氏還帰山」[48]という一節がある。汝水が虢略に源を発するといえよう。また、「汝水又東南逕壷丘城北，故陳地」という『水経注』の注を考慮に入れると、陳の故地も汝水の流域の範囲内に入るところだとわかる。なお、秦の将軍である蒙武が楚を滅ぼそうとした際に、率いた軍隊は「汝水」両岸に沿いつつ「陳邑（河南淮陽県）」[49]へと前進した、という記録がある。これを見ると、陳郡に行く場合「汝水」沿岸が通り道であったといえる。とすれば、「汝水のほとり」へ公用でやってきた李徴に異変が起きた背景は、汝水を媒介にして、上流の出身者李徴が下流に故郷を持つ袁傪に思いを致さずにはいられないためだと読み取れる。歪められた政局を変える力を持っているにもかかわらず、八方美人的な態度しか示さずにいる「温和」な「監察御史」の袁傪。対して、「狂狷」なる「賤吏」のままの李徴。両人の絆を喚起させる「汝水」に来て

[45]（唐）王維（著）（清）趙殿成（箋注）『王右丞集箋注』（1998、上海：上海古籍、226-227 頁）
[46]李約瑟『中国科学技術史第 4 巻　物理及相関技術　第 3 分冊 土木工程与航海技術』（2003、上海：古籍、10 頁）
[47]注 13、459 頁
[48]（北魏）酈道元（著）陳橋駅（校証）『水経注校証　四十巻』（2007、北京：中華書局、497・507 頁）
[49]戦争簡史編写組（編）『中国歴史戦争簡史』（1993、北京：解放軍出版社、70 頁）原文は中国語

しまったからには、その潜在意識が必然的に呼び起こされることになり、李徴はいよいよ「発狂」せずにはいられないだろう。

3.2.3 郷原なる袁傪像

中国の諸材源にはないが、「山月記」にしかない独創的な描写として「温和な袁傪の性格」という一節がある。この形容詞は一般的にプラスなものと受け止められがちだが、袁傪を成功者として、李徴を失敗者としか考えられないのが現在の通説における問題である。渥美孝子「中島敦「山月記」」[50]の見解によると、「「温和な」という形容が、袁傪を穏当で中立的な他者と見なすことにつながる」「李徴を敗残者と見なすかのような冷ややかな語り口は影を潜める」という。新井通郎「中島敦「山月記」の世界」[51]の分析を見ると、「李徴にないものを持つ人物として、李徴の人間性の欠落部分を完備した、成功者として袁傪を登場させている」という。言い換えれば、「温和」な性格を持つ者が優位に立つのに対して、それを持たない者は人格的な欠陥があるため、人生の敗者に転落する、という論調である。

いったい、「温和」という漢語はどのようなニュアンスを帯びているのだろうか。宋の朱熹が『大学』の一節について「有人極温和而不甚曉事，便是賢而不智」[52]（筆者訳：極めて温和で世間知らずな人は、賢にして不智なのだ）と説き明かしたように、温和ではあるが愚かな人が存するのである。また、「骨のない温厚は、孔子の中庸ではなかった」[53]という論語研究者の観点を反芻すると、骨のない「温和」も決して孔子の理想とはいえまい。骨の有無をめぐる議論は、恐らく『孟子』の一節を論ずる朱熹[54]の発言に由来したもの

---

[50]田中実（他編著）『「新しい作品論」へ、「新しい教材論」へ：文学研究と国語教育研究の交差３』（1999、東京：右文書院、133・138 頁）所収
[51]「二松」2008 年 3 月、118 頁
[52]（宋）黎靖徳（編）王星賢（点校）『朱子語類』（2004、北京：中華書局、375 頁）
[53]佃井久満治『論語の発掘：道義の再興を念じて』（1971、長野：「論語の発掘」刊行会、238 頁）
[54]注 52、1477 頁

だろう。則ち「狂狷是箇有骨肋底人。郷原是箇無骨肋底人」（筆者訳：狂狷は気骨のある人。郷原は気骨のない人）という分け方である。よって、骨のない温和は、中庸でなくて郷原に当たる人だし、対照的に骨のある人は狂狷といえよう。

この「温和」と「郷原」との関係を弁える際に、なお次の三点を見逃せないだろう。

<1>晋の隠逸者である戴逵の論を見ると、「郷原似中和，所以乱徳」[55]（筆者訳：郷原は中和に似ているため、徳を乱すのだ）とある。「中和」とは「温和」[56]の意である。従って、本質的に「郷原」ではあるが「温和」のように演出しているため批判されたものだと言えよう。そのような人間像が袁傪に近いだろう。

<2>「温和にして是非を弁えないものが郷原だ」[57]という言説がある。「山月記」のなかで、「虎」になった李徴が妻子への配慮を真摯に願ったのは、見方によっては、袁傪を試すためのものでもある。生きているのにもう死んだと告げて欲しい。この嘘に接して、袁傪は「李徴の意に副い度い」と答えている。やむを得ないわけがあるにせよ、事実を伝えない袁傪の姿勢は、他人の機嫌ばかりを取る人だと、李徴の目に映ったものであろう。袁傪はお人よしだから、それぐらいのことは手伝っても良さそうなものである。その意味で、「郷原」と決め付けられても仕方がないだろう。

<3>「一途に温和に走ったら郷原になり易い」[58]という捉え方がある。後述するように袁傪は監察御史のあるべき機能を果たさず、いつも玄宗の顔色をうかがっているように見える。その意味で、「郷原」と言えよう。

叙上の定義のうち、「山月記」の袁傪は<2>と<3>に該当する人だ

[55]（唐）房玄齢（等撰）『晋書』（1974、北京：中華書局、2458 頁）
[56]北京対外経済貿易大学（他編）『日中辞典』（1987、東京：小学館、1195 頁）
[57]孫恩棣『怪誕博弈論：掲示怪誕行為背後的真相』（2012、北京：当代中国、208 頁）原文は中国語
[58]周予同（他著）『論語二十講』（2009、北京：華夏、83頁）原文は中国語

から、「温和」ばかりでなく、自分の好悪をおさえてまで上司、下僚の出方にあわせておべっかを使う。これが「郷原」の権化でなくて何だろうか。故に、<1>に準じて「郷原似温和」の人間像だと捉え直すべきだろう。

「狂狷」の性格の持ち主である李徴は四書五経を誦ずることができると吐露しているが、『論語』「公冶長篇」の「子、陳に在りて曰わく、帰らん与(か)、帰らん与。吾が党の小子、狂簡にして、斐然として章を成す。之れを裁する所以を知らず」[59]という一節が李徴・袁傪らにとって格別に大切なはずである。孔子が狂狷の人材を教育したい考えを表明した場所は「陳」である。『文苑英華』の編者の一人である宋白[60]に従えば、後魏に立てられた「陳郡」は春秋の「陳」の国都に当るところだという。袁傪の出身地「陳郡」はちょうど孔子が滞在していた「陳」だったのである。『論語』を熟読したうえで進士の試験に受かった袁傪は、孔子の「狂狷」説が発生したところを故郷として持つわけだから、「狂狷」とはいったい何なのか、ひとしお身に沁みたはずである。

『論語』を引用した『孟子』のうち、「吾党之士狂簡」「郷原徳之賊」[61]という二節がある。『孟子』「尽心篇」[62]を繙くと、「狂狷」と「郷原」が対立するという孔子の価値判断を引用した孟子は、一歩踏み込んで「郷原」を非難している。

「山月記」に二極対立があるとすれば、「人虎伝」以来の善悪ではない。検討してきたような「狂狷」と「郷原」との対峙があったとあらためて捉え直すべきであろう。

3.2.4 李徴詩の「微妙な点」とは

『酔醒石』では、李微が李儼に「二十章」弱の「文」を書き残し

---

[59]吉川幸次郎『論語（上)』(1996、東京：朝日新聞社、152 頁）

[60]（宋）司馬光（編著）顧頡剛（等覆校)『資治通鑑』(1987、台北：華世、5951 頁）190 巻

[61]（清）顧炎武（著）黄汝成（集釈)『日知録集釈：全校本』(2006、上海：上海古籍、443-444 頁)「顧炎武」の名は、中島敦の断簡残片に記されている。(注 13、460 頁）

[62]（宋）朱熹（撰)『四書章句集注』(1983、北京：中華書局、375-376 頁）

てもらったところ、李儼の側から「君文誠高美矣」という最大級の褒め言葉を送られた。それに対して、「山月記」の李徴が袁傪に「三十篇」もの「詩」を文字化してもらった際に、「格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思はせるものばかりである」と褒められるが、「しかし、この侭では、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠ける所があるのではないか」と反省点も忘れずに述べられている。

文学作品に対して、褒める一方の『酔醒石』などを採らずに、「山月記」は褒めた後に揚げ足を取る。李徴の韻文にぶつけた袁傪の批判の論理とは、どのようなものなのか。

袁傪の「非常に微妙な点」について、吉村久夫「中島敦「山月記」論：「欠ける所」についての考察」[63]は、現行の八つの説を丁寧に整理した上で、それぞれの問題点を指摘している。特に「時流、その才能を世に送り込もうとする協力者等々のさまざまな要因が整って初めて「世に出る」のであって、非凡の才が埋もれたまま一生を終えることは間々あるのである」という分析が示唆に富む。こうした論を踏まえて、改めて「山月記」を見直してみよう。「狂狷」な李徴が直面した時流は、袁傪の郷原派が支配的なものである。袁傪の論理を究明する際には、『孟子』「尽心篇」[64]を見逃せないだろう。「行ないは言を顧りみざるに」と「行ないは何ぞ踽踽涼涼や」と、それぞれ狂者・狷者を笑う[65]郷原派の姿勢が認められるのである。李徴の「欠ける所」が発見されたのは、狂狷派の欠点を貶す、という『孟子』が示した構図を郷原派の袁傪が取り入れた結果であろう。

では、「非常に微妙な点」とは具体的に「何処」なのだろうか。答えは「温和」な袁傪が立脚した郷原派の主張ではないかと思われる。袁傪の目に映った李徴の問題点は、「郷原」の欠如にある。これを受け入れない限り、仕官への運が開けない。それと関連して、漢詩と「郷原」との間に、どのような関わりがあるのか。日本の広瀬淡窓

[63]「兵庫教育大学近代文学雑志」2002 年 2 月、37 頁
[64]金谷治『孟子』（1978、東京：朝日新聞社、284 頁）
[65]注 52、1477 頁。原文：「郷原笑狂者」「郷原笑狷者」

（1782-1856）『淡窓詩話』[66]の一節が注目に値する。

孔子ハ之ヲ非ルニ非ル可キナキノ郷原ヲ取ラズシテ行ヒ言ヲ掩ハザルノ狂者ヲ取リ玉ヘリ今ノ詩人詩ニ疵サヘナケレバ好シト思フハ詩中ノ郷原タルコトヲ求ムル者ト云ベシ

『論語』の「郷原」「狂」を祖述したうえで、作品のなかに欠点さえなければよいとするものを「詩中ノ郷原」だと戒めている。広瀬は欠点が無いことへの奇妙なこだわりを「郷原」だと定義付けて難じている。このように江戸時代の詩話まで検討してみて、ようやく袁傪の詩観と李徴の理念とのズレが浮かび上がってくる。「温和」な袁傪の立場からすれば、李徴に欠けている「非常に微妙な点」とは「郷原」の心理状態（修辞面では読者に迎合的な手腕、政治面では皇帝と僚友に流俗的な姿勢）に違いない。両者には意見の行き違いがあった。袁傪に言わせると、李徴の問題は「本性に任せる者は狂狷のようなものであり」「修養を積むにはまだ欠陥があって、その病は明らか」[67]ということにあるだろう。袁傪と正面から向き合わなければならないのは、その志を盛り込んだ漢詩に接した人々からいかなる欠点を言われても気にかけず、ただ本来の性格の発露だけを座右の銘としつつ「狂狷」に走った李徴である。

「郷原」「狂狷」両派が理念をめぐって争ったところ、どちらの勝ちに終わったのだろうか。袁傪の「欠ける所がある」という評価と、李徴の「詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男」という自白からすると、「郷原」の勝利に決着したと言い切れる。ところが、「自嘲」の機能を考え直すと、それは表面上の問題に過ぎない。

「郷原」「狂狷」両者の優劣については、明末の給事中である祝世禄が書いた『祝子小言』[68]によると、「郷原」は聖学の皮を得たものであり、「狂狷」は瑕のある玉であり、「郷原」は瑕のない石だという本質をついた発言をしている。明末清初の儒学者である孫夏峰が

---

[66]1883、東京：博聞社、下巻 3 頁

[67]厳寿澂「詩通於《易》——田間詩論詮説」（「伝統中国研究集刊」、2009 年 6 月、268-269 頁）原文は中国語

[68]1573、出版地：不明、25b・26a

残した四書に関する論述である『四書近指』[69]は「狂は聖人の神であり、狷は聖人の骨であり、郷原は聖人の皮である」と証言している。服部栗斎が頼杏坪に贈った一文（1790 年）のなかに、「狂狷ハ入聖の資ナリ」[70]と書き綴ったのは、同じく「狂狷」者の資質を正しく評価した現れである。孔孟の目からすると、「狂狷」は聖人の真髄を得られるものであり、「郷原」は聖人のように装えても到底聖人ではないため、君子を偽る俗物というわけである。

なお、周月亮「中庸·郷原·“学為君”——《孔学儒術》之一」[71]の分析を忘れてはならないだろう。それによると「郷原」の行動様式は「人に媚びてばかりいながら、却って馬鹿馬鹿しく狂狷の士を教え諭そうとする」という側面がある。

「山月記」の場合、上位に立つ袁傪が「哀しく」李徴の「自嘲」を聞く場面では確かに成敗の優劣がすでに決まっている。郷原派の詩観に立って狂狷派の詩が裁断された以上、李徴の作品に「郷原」の要素が足りないと言われても仕方がない。李徴は迎合主義を採らないため、第一流作品としては失格だと判断されたのである。祝と周との論旨を吟味しつつ当時の政局を考えると、実際に、李徴は狂人の皮をかぶっているものの、聖人の精神を目指している士である。出鱈目に「狂狷」に対して同情してばかりいる「郷原」の袁傪は聖人の皮をかぶっている似非聖人である。安禄山の乱が本当に勃発した日に、結果論的にいうならば、郷原派の袁傪のかつて占めた優位がいかにばかばかしく見えることだろうか。一方、卑官を甘受する狂狷派の李徴はいかにも聖人らしく思われることだろう。

3.2.5 中島敦の方法：自嘲

『酔醒石』には、「李微一次不中．便罵一次試官」（筆者訳：李微は一たび合格せねば、試験官を一回罵る）とだけあって、「嘲」の表現が出ていない。

---

[69]文津閣四庫全書 203、2006、北京：商務印書館、176 頁
[70]頼山陽（著）木崎愛吉（他編）『頼山陽全書　詩集』（1932、広島：頼山陽先生遺蹟顕彰会、4 頁）所収木崎愛吉「『春秋遼豕録』解題」
[71]「河北師院学報（社会科学版）」1995 年 3 月、51 頁。原文は中国語

そのような中国の材源と異なって、中島敦は「山月記」の李徴像を形付ける際に「自嘲」の性格を新しく付与していることが分かる。次の三箇所を確かめておこう。

①旧詩を吐き終つた李徴の声は、突然調子を変へ、自らを嘲るが如くに言つた。

②袁傪は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いてゐた。

③李徴の声は併し忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて、言つた。

①～③の用例について、各角度から考察がなされてきた。まず、日本の場合、増淵恒吉「文学作品における形象の問題—「山月記」の取扱い方について—」[72]は「むきになり、しんけんになっているときには、自嘲は出て来ない」と捉えている。しかし、「温和」のように演出した郷原派の袁傪に合わせるために、必要な演出として李徴は自嘲したと見るべきであろう。

次に、中国の研究成果にも目を向ける必要があるだろう。尹小娟「"自信"与"自卑"的沖突——従"自嘲意識"看《山月記》」[73]は、自嘲の狙いは憐憫の情を起こさせるためではなく、逆に軽視されないようにするためにある、という。ただ自嘲の作用が李に向かうとともに、袁傪にも反作用してゆく側面を看過できないだろう。この難問を解くためには、陳蘭村・葛永海共著の「文化人格的圧抑与自救——論古代文人的自嘲意識」[74]が参考になるだろう。同論文は中国の自嘲文学を考察した上で、自嘲意識の表現を三つのレベルに分類している。(1)消極退避式の施すすべがない悲鳴、(2)狂狷抗争式の憤懣疾呼、(3)恬然超脱式の知性洞察となっている。特に(2)の類型が重要であろう。その趣旨を掻い摘んでいえば、次のようになる。初唐まで官界での浮き沈みを経験していた詩人の王績[75]は、「無功」という

[72]「日本文学」1956 年 11 月、22 頁
[73]「安徽文学」2013 年 1 期、55 頁。原文は中国語
[74]「貴州社会科学」2001 年 2 期、75-77 頁。原文は中国語
[75]劉中文『唐代陶淵明接受研究』（2006、北京：中国社会科学、74 頁）による

字をつけている。なぜなら、才能があるのに上層部からは不相応な低い地位しか授けられておらず、手柄を立てる機会が与えられないからである。そのような文人の自嘲は、すでに気楽なからかいではない。その自我諷刺の背後には自己肯定と自己評価がある。表向きはユーモラスではあるが､腹の中は憤懣の気持ちでいっぱいである。この狂狷式の自嘲は圧迫の産物であり、自嘲者の剛毅と自負を表している。そして、「狂狷抗争式の憤懣疾呼」は「外部世界全体を嘲弄しようとするものである」[76]という陳蘭村の指摘は、問題の本質を見事に掴んでいる。

以上のことを鑑みるならば、懺悔の言葉を並べているように見えても、李徴は相変わらず自嘲の口吻をうち捨てず、安禄山の動乱が始まろうとしている大唐の混迷した政情を皮肉っている。「君已乗軺気勢豪」という詩句に称賛されるような高官の袁傪が政治問題の解決に取り組まないという不作為を見せていることに応じて、李徴は変身せざるをえないのである。自嘲意識が具体的に現われた場面としては、郷原派の袁傪に対して、狂狷派の李徴が「虎」になったのを「あさましい姿」「あさましい身」と自ら貶したり、「今日爪牙誰敢敵」「我為異物蓬茅下」と詠じたりするところが挙げられる。彼の「憤懣」は、既に「怏々として楽しまず」に反映されている。彼の「疾呼」は、「何か訳の分らぬことを叫びつつ」「不成長嘯但成嘷」「空谷に向つて吼える」「月に向つて咆えた」「一匹の虎が怒り狂つて、哮つてゐる」などと随所に散見するのみならず、「二声三声咆哮した」と、掉尾の勇を奮う場面まで強調されている。そのような「自嘲」の手法を袁傪が「哀しく聞いてゐた」のに対して、李徴は逆説的に諷刺しようとしたがために、再三自嘲の言葉を発したのであろう。

4. 小説の主題

と、王績の性格のなかに「狂狷」が見出だせる、という。

[76]注 74、77 頁。原文は中国語

「山月記」の研究史を振り返ると、「逆説」の手法を見出した論が少なからずある。浜川勝彦「「山月記」論——二律背反と逆説の世界——」[77]が代表的である。それによると、「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」は、「李徴の外観と内心との二律背反をもたらした元兇であるとともに、この心の在り方そのものも二律背反の憂き目をみているのであり、そのような状態を一挙に表現する「逆説」である」という。

形容詞に関しては、「狷者」が「胆小」[78]で、「狂者」が「自大」[79]という中国論者の定義がある。日本語に訳すと、狷者が臆病で、狂者が尊大となるだろう。ならば、李徴の内部の問題として、狷者の自尊心と狂者の羞恥心との間の葛藤が生じていたと看取できる。

しかし、重要なのはむしろ李徴の狂狷と袁傪の郷原性との対峙関係と、外部の政局とに向けた逆説的な諷刺のほうにあるのだろう。

4.1 安禄山という＜虎＞

「天宝の末年」に即していえば、実は安禄山という＜虎＞は時代の寵児としてもてはやされていた。宋の欧陽脩らの撰『新唐書』[80]によると、安禄山の動静を確認するために、玄宗皇帝は輔璆琳を遣わして安に果物を下賜したが、安の巨額の賄賂を着服した輔は「安には二心なし」と復命した。それを受けて、玄宗はほっとした。ところが、例の贈賄事件がばれてしまい、玄宗は別の事にかこつけて輔を殺した、という。この事件を処理する際に、玄宗は「只殺蒼蝿，不打老虎」（蝿を殺すが＜虎＞を打たない）式の裁き方を示した、と北溟玉『大唐乱世』[81]によって描き出されている。玄宗は贈賄者の安の罪を問わずに収賄者の輔だけを処刑した、というわけである。

このように、安禄山の乱が起こる瀬戸際、＜虎＞として比喩された安のイメージは、人々の心に深く秘められる憂いとなっていたの

---

[77]「国語国文」1971 年 8 月、21 頁
[78]韓星『儒家人文精神』（2012、西安：陝西人民、50 頁）
[79]仿佛『仿佛論孔子』（2007、北京：団結、88 頁）
[80]1975、北京：中華書局、6416 頁。原文：「帝使中官輔璆琳賜大柑、因察非常。禄山厚賂之、還言無它、帝遂不召。未幾事洩、帝託它罪殺之、自是始疑。」
[81]2011、合肥：黄山書社、72 頁

である。

4.2 袁傪という「監察御史」

『新唐書』[82]によると、「御史大夫」には「百官の罪悪を糾す」という職務があり、「監察御史」については、「官人の善悪を察す」という規定がある。『安禄山事迹』[83]を見ると、天宝年間、安禄山は三回以上「御史大夫」に任命されている。安禄山の乱が起きた 755 年には、安が依然として「御史大夫」に就いていたかどうかの確認はできない。「監察御史」である袁傪にとって、安は少なくとも前任の長官であるはずである。玄宗が＜虎＞（安禄山）を打たぬ方針を固めてくると、「監察御史」の袁傪は即座に上奏書を奉って安禄山を弾劾すべきであり、責任逃れは許されない。ところが、「勅命を奉じ」た御史は嶺南へと旅立つ。皇帝の言いなりにしか動かないように見える。

4.3 弾劾権に対する諷刺

「狂狷」の士と自任する李徴の立場から天宝末の政治動態を分析すると、北の＜虎＞（安禄山）を当然打つべきタイミングがあるはずなのに、郷原派の袁傪が安の＜虎＞を座視している。安禄山の乱の暗雲が漂っているのを見るに見兼ねて、李徴は居ても立ってもいられないあまりに、責任を取れといわんばかりに袁傪にその思いをぶつけるつもりであった。ことさら「虎」に変身したのもゆえなしとしない。また、「一年程」雌伏して、「虎」は照準を合わせて「躍りかかる」目標を袁傪のみに設定する。言い換えると、北の＜虎＞を弾劾すべきなのにもかかわらず、「郷原」なる監察御史は南へ出張していく。形骸化した監察御史の行方を遮る物として、最も諷刺効果を持つのが「虎」にほかならなかった。

水木楊「中華人民共和国が消滅する日」[84]によると、現代中国の政界を批判するために「只(ヅ)打(ダ)蒼蠅(ツアイン)、不(ブ)打(ダ)老虎(ローホー)さ」という民衆の声が上がっており、それは「「蒼蠅」（小物）は捕まえるが、「老虎」（大

---

[82]注 80、1235・1239 頁
[83]注 25、75・77-79 頁
[84]「文芸春秋」2005 年 3 月、204 頁

物）は見逃している」と正しく訳されている。ただ「只打蒼蠅、不打老虎」は現代の流行語になる前に、中島敦の在世中に用いられていた。1931 年に中華民国の監察院が発足したが、監察委員の劉成禺は当時の監察院を「不打老虎,只拍蒼蠅」[85]（筆者訳：蝿しか追い払えずに、虎を打たじ）だと定義付けているからである。台湾の社説[86]を見ても「只打蒼蠅、不打老虎」という「郷原」のやりかたをやめるよう、「監察院」に呼びかけるような書き方がある。安禄山の場合は、＜虎＞として打たれなかったという現象は存在していたが、北溟玉『大唐乱世』の「不打老虎」という核心に触れた描き方が現れて初めて、安の状況が如実に言い当てられるようになった。

李徵は監察御史が南下する途中でどうしても「虎」と化してまで待ちぶせていなければならなかったのである。折角の機会を狙って、李徵は説教されているように見えても、自嘲の手法を用いつつ、逆に説教し続けていたのであった。

中島敦の小説「北方行」[87]を読むと、「弾劾」の用例がある。実は、戦争末期の日本も同様な問題を抱えていた。中島の先輩（一高と東大）に当る者を洗い出すと、「昭和十九年五月、横浜地裁判事在職中に、太平洋戦争の中止を求める手紙を当時の東条首相に出し、判事懲戒裁判にかけられ、一審で免職の判決、二審係属中に終戦となった」[88]という行動を取った岡井藤志郎がいた。岡井敏『東条弾劾：戦時下首相を糾弾したある判事の生涯：昭和史の記録』[89]によると、それは「弾劾の手紙」である、という。天皇の信任を受けた東条首相を打倒しようとしたものの、失敗に終わってしまった。それより二年前に「戦時中の小説が、弾圧をさけて、歴史小説に赴いた」[90]という状況のなかで、「弾劾権の機能喪失への諷刺」を主題にした「山月記」が他に先駆けて登場していたことを、決して無視してはいけ

[85]劉成禺（著）蔡登山（輯）『世載堂雑憶』（2010、台北：秀威資訊科技、7 頁）
[86]「掀開台電購煤的黒盒子」（「聯合晩報」1988 年 4 月 23 日）
[87]中島敦『中島敦全集第三巻』（1948、東京：筑摩、114 頁）
[88]「読売新聞」1974 年 10 月 24 日、「岡井藤志郎氏（元代議士、弁護士）死去」
[89]1979、東京：現代史出版会、6・69・85・220 頁
[90]長谷川泉「近代歴史小説入門」（「国文学解釈と鑑賞」1970 年 4 月、18 頁）

ないだろう。

5.おわりに

「山月記」を正しく把握するためには、小森説が唱えた「歴史性」の方向が前提となる。それを受け止めて、中国の材源との相違を精確に見分けることにより、はじめて安禄山の陰影が『山月記』全体に覆い被さっているということを浮かび上がらせることができる。また、中島敦が描き出した李徴の性格（狂、狷）の独創性を正確に捉えることも可能となる。さらに、この「狂狷」について論孟を通じて照らし出すと、袁傪をめぐる性格描写が「郷原」に該当するものだと断言できる。なお、汝水のほとりに来ないと発狂しないことは、下流の出身者である袁傪が高官になったことに対する、李徴の蓄積した不満の現れであろう。李徴の故郷は汝水上流であった。袁傪との再会で、李徴は自嘲の調子を貫いている。これは決して自暴自棄となった弱者の悲鳴ではない。中国の自嘲文学の伝統を確認すると、彼の狙いどころは外部世界全体をからかい、なぶりものにすることにほかならなかった。

生き物のなかで、李徴が「虎」を選んで変身したのは、必然性があった。「蝿を打てど、虎を打たぬ」という中国監察制度に関する慣用句があるからである。東北に安禄山の叛乱が起こりそうになっても、玄宗皇帝は「蝿しか打たずに、虎を打たじ」という処置をとる。北にいる＜虎＞（安禄山）が打たれてしかるべきなのに、郷原派の監察御史は見過ごしたまま南下する。だからこそ、李徴はわざわざ「虎」となって弾劾権を行使しない監察御史が進むべき前途を遮断したのである。

いうまでもなく「山月記」は虚構の歴史小説である。中島敦の独創は、安禄山の乱の発生を疑う余地のない段階に至る時、「狂狷」者は余儀なく「虎」と姿を変えて、かろうじて郷原派の「監察御史」に訴えるしかないという点である。狂狷派の漢詩について、郷原精神が不足したと批判を見せたところに、皮肉にも郷原派自身の短所

をさらしてしまった、といえよう。そして中島敦は、返す刀として、日本の政情を批判したのではないか。すなわち、東条首相が率いた政府の歩む方向に間違いがあっても、弾劾の大権を持っている政治家はそのことには手を付けずに「郷原」主義を墨守する。一般の国民も権威に従わざるをえないだけに、「狂狷」の輩である中島敦は憤懣やるかたない。こうした社会的背景と自らの憤りに基づきつつ、中島は「山月記」の李徴を「狂狷」性を帯びた憂国慨世の士として、また一方の袁傪を「郷原」性を備えた似非聖人として造型し直したのであろう。

＜付記＞初出誌の繁体字、簡体字、日本の旧字体は、常用漢字に改めた。本稿は台湾大学「第四届日本研究年会」（2013 年 11 月 9 日）での口頭発表と、国文学研究資料館「第 37 回国際日本文学研究集会」（2013 年 12 月 1 日）でのポスター発表に加筆修正したものである。

参考文献

日本語

渥美孝子 1999「中島敦「山月記」」、田中実（他編著）『「新しい作品論」へ、「新しい教材論」へ：文学研究と国語教育研究の交差３』、東京：右文書院、124-143 頁

新井通郎 2008「中島敦「山月記」の世界」、「二松」3 月、109-128 頁

石井和夫 2004「「星女郎」と「山月記」」、「文芸と思想」3 月、15-25 頁

今村与志雄（訳）1988『唐宋伝奇集（下）』、東京：岩波、331-332 頁

岡井敏 1979『東条弾劾：戦時下首相を糾弾したある判事の生涯：昭和史の記録』、東京：現代史出版会、6・69・85・220 頁

金谷治 1978『孟子』、東京：朝日新聞社、284 頁

木崎愛吉 1932「『春秋遼豕録』解題」、頼山陽（著）木崎愛吉（他編）『頼山陽全書　詩集』、広島：頼山陽先生遺蹟顕彰会、4 頁

岸達志 1953「「山月記」の比較文学的考察」、「近代文学攷」11月、1-11 頁
国民文庫刊行会（編）1924『国訳漢文大成　第十二巻』、東京：国民文庫刊行会、495-502 頁
小森陽一 1998『〈ゆらぎ〉の日本文学』、東京：日本放送出版協会、227-253 頁
作者不詳 1974「岡井藤志郎氏（元代議士、弁護士）死去」、10 月 24 日
高田瑞穂 1960「山月記（二）《中島敦鑑賞》」、「国文学解釈と教材の研究」、1 月、146-151 頁
高橋英夫（他編）2001『中島敦全集１』、東京：筑摩、529・566 頁
高橋英夫（他編）2001『中島敦全集２』、東京：筑摩、328 頁
高橋英夫（他編）2002『中島敦全集３』、東京：筑摩、223・460・459 頁
武信彰（他編）1998『プログレッシブ中国語辞典』、東京：小学館、511 頁
佃井久満治 1971『論語の発掘：道義の再興を念じて』、長野：「論語の発掘」刊行会、238 頁
中島敦 1942「山月記」、「文学界」2 月、138-144 頁
中島敦（原作）司敬（作画）1992『山月記・李陵』、東京：ぎょうせい、21 頁
中島敦 1943「弟子」、「中央公論」2 月、142 頁
中島敦 1992『中島敦：1909-1942』、東京：筑摩、27 頁
中島敦 1948『中島敦全集第三巻』、東京：筑摩、114 頁
日本国語大辞典第二版編集委員会 2001『日本国語大辞典』4、東京：小学館、483 頁
長谷川泉 1970「近代歴史小説入門」、「国文学解釈と鑑賞」4 月、10-24 頁
浜川勝彦 1971「「山月記」論——二律背反と逆説の世界——」、「国語国文」8 月、17-36 頁

広瀬淡窓 1883『淡窓詩話』、東京：博聞社、下巻 3 頁
北京・商務印書館（他編）1992『中日辞典』、東京：小学館、1967・1962・165・804 頁
前田角蔵 1993「自我幻想の裁き——「山月記」論——」、「国語と国文学」10 月、42-54 頁
増淵恒吉 1956「文学作品における形象の問題—「山月記」の取扱い方について—」、「日本文学」11 月、18-24 頁
三浦吉明 2002「「山月記」の季節について」、「人文研究：神奈川大学人文学会誌」、119-143 頁
水木楊 2005「中華人民共和国が消滅する日」、「文芸春秋」3 月、198-210 頁
宮崎健三（編著）1968『小説の教え方』、東京：右文書院、207-218 頁
吉川幸次郎 1996『論語（上）』、東京：朝日新聞社、152 頁
吉村久夫 2002「中島敦「山月記」論：「欠ける所」についての考察」、「兵庫教育大学近代文学雑志」2 月、35-46 頁

中国語

（唐）王維（著）（清）趙殿成（箋注）1998《王右丞集箋注》、上海：上海古籍、226-227 頁
王曙 2002《唐詩名句詳解詞典》、北京：北京工業大學、135 頁
卞孝萱（編）2003《唐代文學百科辭典》、上海：漢語大詞典、140 頁
尹小娟 2013〈“自信”與“自卑”的沖突——從“自嘲意識”看《山月記》〉、《安徽文學》1 期、55 頁
（宋）司馬光（編著）顧頡剛（等覆校）1987《資治通鑑》、臺北：華世、5951 頁
北京對外經濟貿易大學（等編）1987《日中辭典》、東京：小學館、1195 頁
北溟玉 2011《大唐亂世》、合肥：黃山書社、72 頁
（宋）朱熹（撰）1983《四書章句集注》、北京：中華書局、375-376

頁
仿佛 2007《仿佛論孔子》、北京：團結、88 頁
作者不詳 1988〈掀開台電購煤的黑盒子〉、《聯合晚報》4 月 23 日
（宋）李昉（等編）1977《太平廣記》、臺北：古新書局、901-902 頁
李約瑟 2003《中國科學技術史第 4 卷　物理及相關技術　第 3 分冊 土木工程與航海技術》、上海：古籍、10 頁
周月亮 1995〈中庸·鄉原·“學為君”——《孔學儒術》之一〉、《河北師院學報（社會科學版）》3 月、49-55 頁
周予同（等著）2009《論語二十講》、北京：華夏、83 頁
（清）東魯古狂生（編）1917《醉醒石》、武進：誦芬室、醉六 1a-11a 頁
（唐）房玄齡（等撰）1974《晉書》、北京：中華書局、2458 頁
（清）洪昇（著）徐朔方（校注）1958《長生殿》、北京：人民文學、224 頁
（唐）姚汝能（撰）曾貽芬（點校）2006《安祿山事迹》、北京：中華書局、73-117 頁
（明）祝世祿 1573《祝子小言》、出版地：不明、25b・26a
施忠連 2005《靈犀和覺悟：心性的智慧》、臺北：新潮社、234 頁
郎寶如（評注）1996《中國古典詩詞精華類編　軍旅卷》、呼和浩特：內蒙古大學、164-165 頁
（明）孫夏峰 2006《四書近指》、文津閣四庫全書 203、北京：商務印書館、176 頁
孫恩棣 2012《怪誕博弈論：揭示怪誕行為背後的真相》、北京：當代中國、208 頁
陳熾彬 1983《汪容甫學述》、臺北：國立政治大學中國文學研究所、19-24 頁。
陳蘭村・葛永海 2001〈文化人格的壓抑與自救——論古代文人的自嘲意識〉、《貴州社會科學》2 期、74-79 頁
森鷗外（等著）姚巧梅（譯）1992《大師小品：日本短篇精典》、臺

北：自立晚報、178 頁
（清）彭定求（等修纂）1960《全唐詩》、北京：中華書局、3479 頁
馮天瑜 2010《中華文化辭典》、武漢：武漢大學、233 頁
新興書局（輯）1975《筆記小說大觀第九編》、臺北：新興、102 頁
楊子家（編著）2012《一言難盡 隋唐五代歷史現場》、蘇州：吳軒、310 頁
趙榮蔚 2009《唐五代別集敘錄》、北京：中國言實、127 頁
（宋）黎靖德（編）王星賢（點校）2004《朱子語類》、北京：中華書局、375・1477 頁
劉中文 2006《唐代陶淵明接受研究》、北京：中國社會科學、74 頁
劉成禺（著）蔡登山（輯）2010《世載堂雜憶》、臺北：秀威資訊科技、7 頁
（宋）歐陽脩（等撰）1975《新唐書》、北京：中華書局、6416・1235・1239 頁
戰爭簡史編寫組（編）1993《中國歷史戰爭簡史》、北京：解放軍出版社、70 頁
錢仲聯（編）1992《愛情詞與散曲鑒賞辭典》、長沙：湖南教育、901 頁
韓星 2012《儒家人文精神》、西安：陝西人民、50 頁
（宋）羅願（撰）2002《爾雅翼》、合肥：安徽教育、68 頁
譚正璧（等著）1984《古本稀見小說彙考》、杭州：浙江文藝、121-122 頁
（清）顧炎武（著）黃汝成（集釋）2006《日知錄集釋：全校本》、上海：上海古籍、443-444 頁
嚴壽澂 2009〈詩通於《易》——田間詩論詮說〉、《傳統中國研究集刊》6 月、253-273 頁
（北魏）酈道元（著）陳橋驛（校證）2007《水經注校證　四十卷》、北京：中華書局、497・507 頁